「古文Ⅲ（読解編）」の特長と使い方

●本書のねらい

このテキストは、大学入試に対応できる古文読解力を養うことを目的としてつくられたものです。

古文読解の基礎となる古語・文法・古典の常識などの知識を身につけ、古文を読むことにもある程度慣れてきたら、多くの古文を読み、いろいろな問題を解いてみるという学習が必要になってきます。このテキストはそのような学習に役だつように、入試によく出題される作品をジャンル別に収め、古文読解の実戦的な演習が積めるように構成されています。

●本書の特色

○このテキストは、入試によく出される作品を選んでジャンル別におさめ、さまざまな設問で総合的な読解力を養うことができるようになっています。

○各回の前半の二ページには基本的な問題を、後半の二ページにはより実戦的なレベルの高い問題がおさめてあり、段階を追った学習ができるようになっています。

○各回に入試のポイントとなるテーマを設け、読解演習の中でそのテーマについて重点的に学習できるようになっています。

○各回についている「基本確認演習」で、古語・文法・古典の常識などの知識事項を確認することができます。

●本書の構成と使い方

○前半の二ページの演習問題……比較的易しい文章による演習問題です。基本的な問題が確実に解けるようになることをねらいとしています。また、適宜「解法のポイント」を付して、理解を助けています。

○基本確認演習……古語の意味・文法の知識・古典の常識などの古文読解の基礎となる知識を確認します。

○後半の二ページの演習問題……入試標準レベルの問題で、古文の読解力を完全なものにすることをねらいとしています。

《解答・解説》（別冊）……解答例とともに、詳しい「解説」と「口語訳」がついています。

目次

1 随筆(1)——基本古語（古今異義語）……4
2 随筆(2)——慣用句・副詞の呼応……8
3 随筆(3)——選択問題の解法……12
4 随筆(4)——現代語訳のしかた……16
5 説話(1)——古典の常識……20
6 説話(2)——登場人物の心情・性格……24
7 説話(3)——指示語……28
8 物語(1)——登場人物の把握……32
9 物語(2)——接続詞の意味・用法……36
10 物語(3)——敬語……40
11 物語(4)——現代語訳のしかた（敬語）……44
12 物語(5)——登場人物の心情・性格……48
13 物語(6)——古歌の引用……52
14 日記・紀行(1)——主語・述語の関係……56
15 日記・紀行(2)——会話文の指摘……60
16 日記・紀行(3)——引用・挿入句……64
17 日記・紀行(4)——まぎらわしい語の識別……68
18 評論(1)——段落と要旨……72
19 評論(2)——対応表現の理解……76
20 評論(3)——空欄補充問題……80
21 評論(4)——主題・要旨……84
22 韻文(1)——和歌・俳句の基礎……88
23 韻文(2)——和歌・俳句の修辞法……92

1 随筆(1)——基本古語(古今異義語)

演習1 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

荒れたる宿の、人目なきに、女のはばかる事あるころにて、ⓐつれづれと籠りゐたるを、ある人とぶらひ給はんとて、夕月夜のⓑおぼつかなきほどに、忍びて尋ねおはしたるに、犬のことごⓒとしくとがむれば、A下衆女の出でて、「いづくよりぞ」と言ふに、ⓓやがて案内せさせて入り給ひぬ。心ぼそげなる有様、いかで過ぐすらんと、いと心ぐるし。ⓔあやしき板敷にしばし立ち給へるを、もてしづめたるけはひの、若やかなるして、「こなた」と言ふ人あれば、たてあけ所せげなるB遣戸よりぞ入り給ひぬる。内のさまは、[1]いたくすさまじからず、ⓕ心にくく、火はあなたにほのかなれど、ものの綺羅など見えて、[2]にはかにしもあらぬ匂ひ、いとⓖなつかしう住みなしたり。「[3]門よくさしてよ。雨もぞ降る。御車は門の下に、御供の人はそこそこに」と言へば、「今宵ぞやすき寝は寝べかめる」とうちささめくも、忍びたれど、ほどなければ、ほの聞こゆ。さて、[4]このほどの事ども細やかに聞こえ給ふに、夜深き鳥も鳴きぬ。来し方行く末かけてまⓗめやかなる御物語に、このたびは鳥も花やかなる声にうちしきれば、明けはなるるにやと聞き給へど、夜深く急ぐべき所のさまにもあらねば、少したゆみ給へるに、隙白くなれば、[5]忘れがたきことなど言ひて、立ち出で給ふに、梢も庭もⓘめづらしく青みわたりたるC卯月ばかりのあけぼの、ⓙ艶にをかしかりしを思し出でて、桂の木の大きなるが隠るるまで、今も見送り給ふとぞ。

(徒然草)

〈注〉 はばかる事——物忌みなどで世間に遠慮すること。　ものの綺羅——衣類や調度品の美麗さ。　夜深き鳥——一番鶏。　桂の木——女の家の庭にある木。

問1 ——線部ⓐ〜ⓙの、この文章における意味を書け。

ⓐ(　　)　ⓑ(　　)

基本確認演習

1 次の各文の——線部の古語の意味を書け。

(1) あからさまに来て泊まり居などせんは、珍しかりぬべし。
(　　)

(2) あさましう、うつくしげさ添ひ給へり。
(　　)

(3) 御かたち有様、あやしきまでぞ覚え給へる。
(　　)

(4) 三寸ばかりなる人、いとうつくしうて居たり。
(　　)

(5) 「こちや」とのたまへど、おどろかず。
(　　)

(6) ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。
(　　)

(7) すべて、いとも知らぬ道の物語したる、かたはらいたく聞きにくし。
(　　)

ⓒ（　　）　ⓓ（　　）
ⓔ（　　）　ⓕ（　　）
ⓖ（　　）　ⓗ（　　）
ⓘ（　　）　ⓙ（　　）

問2 ～～線部A～Cの読み方を書け。

A（　　）　B（　　）
C（　　）

問3 ――線部1は①どういうことをいうのか、②この部分は何に対比してこのようにいったものか。

①（　　）
②（　　）

問4 ――線部2は、どのようなことをいっているのか。

（　　）

問5 ――線部3を連語「もぞ」に注意して現代語訳せよ。

（　　）

問6 ――線部4の主語はだれか。

（　　）

問7 ――線部5はどういう意味か、次から適するものを選び、符号を○で囲め。

ア 女の心に深い印象を残す言葉　イ 今夜のことは忘れがたいということ
ウ 女のことを忘れにくいということ　エ 自分を忘れては困るということ

---

(8) 「などかう音もせぬ。もの言へ。さうざうしきに」と仰せらるれば、
（　　）

(9) 暮れがたき夏の日ぐらしながむればそのこととなくものぞ悲しき
（　　）

(10) 七夕祭るこそなまめかしけれ。
（　　）

(11) 青丹(あをに)よし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛りなり
（　　）

(12) この世にののしり給ふ光源氏、かかるついでに見奉り給はむや。
（　　）

(13) そのこと果てなば、とく帰るべし。久しく居たる、いとむつかし。
（　　）

(14) 廊の戸の開きたるに、やをら寄りてのぞきけり。
（　　）

(15) ねびゆかむさまゆかしき人かな。
（　　）

☆古語を知ることは古文の第一歩。文法事項を知っていても、古語を知らなければ意味、内容を正しくとらえることは出来ない。

演習2 **次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。**

雅房の大納言は、才かしこく、よき人にて、大将にもなさばやと思しけるころ、院の近習なる人、「ただ今あさましき事を見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房の卿、鷹に飼はんとて生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、疎ましく憎く思し召して、日ごろの御気色も違ひ、昇進もし給はざりけり。さばかりの人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど、犬の足は、あとなき事なり。虚言は不便なれども、かかる事を聞かせ給ひて、憎ませ給ひける君の御心は、いとたふとき事なり。

大方、生けるものを殺し、痛め、闘はしめて遊びたのしまん人は、畜生残害の類なり。万の鳥獣、小さき虫までも、心をとめて有様を見るに、子を思ひ、親をなつかしくし、夫婦をともなひ、嫉み、怒り、欲おほく、身を愛し、命を惜しめること、ひとへに愚痴なる故に、人よりもまさりてはなはだし。彼に苦しみをあたへ、命を奪はん事、いかでか痛ましからざらん。すべて一切の有情を見て、慈悲の心なからんは、人倫にあらず。

（徒然草）

〈注〉 院――後伏見上皇（ここは在位中のこと）。　残害――互いに傷つけ合うこと。　一切の有情――すべての生き物。　人倫――人類・人間。

問1 ――線部ⓐ～ⓕの古語の意味を書け。

ⓐ（　　）　ⓑ（　　）
ⓒ（　　）　ⓓ（　　）
ⓔ（　　）　ⓕ（　　）

問2 ――線部1・2を、それぞれ主語を入れて現代語訳せよ。

1（　　）
2（　　）

問3 ――線部3「さばかりの人」とはどういう人をいうのか。

（　　）

問4 ――線部4・5を現代語訳せよ。

4（　　）
5（　　）

問5 この文章で作者の主張したいことはどういうことか、自分のことばで述べよ。

（　　）

演習3 **次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。**

よろづのことよりも情けあるこそ、男はさらなり、女もめでたく（A）。なげのことばなれど、せちに心にふかく入らねど、いとほしきことをば「いとほし」とも、あはれなるをば「げにいかに思ふらん」などいひけるを、伝へ聞きたるは、さし向かひていふよりもうれし。

いかでこの人に、思ひ知りけりとも見えにしがな、とつねにこそおぼゆれ。

かならず思ふべき人、とふべき人は、さるべきことなれば、とり分かれしもせず。さもあるまじき人の、さしいらへをもうしろやすくしたるは、うれしきわざなり。いとやすきことなれど、さらにえあらぬことぞかし。

おほかた、心よき人の、まことにかどなからぬは、男も女もありがたきことなめり。また、さる人も多かるべし。（枕草子）

〈注〉なげのことば――ちょっとしたことば。　とり分かれしもせず――他に比べて特別に喜ぶこともない。

問1 (A)に入る語はつぎのどれか、次から選び符号を○で囲め。

ア おぼゆ　イ おぼゆる　ウ おぼゆれ　エ おぼえよ

問2 ――線部1～6の意味はどれか、次から選び符号を○で囲め。

1 ア あっさりすべきだ　イ まったくないことだ　ウ いま一歩だ　エ いうまでもないことだ
2 ア すばらしいと　イ 祝ってやりたいと　ウ おもしろいと　エ めったにないと
3 ア いじらしい　イ 気の毒な　ウ 望ましい　エ りっぱな
4 ア すぐに　イ あとになってから　ウ 気やすく　エ 思いもよらず
5 ア 欠点　イ 財産　ウ 才能　エ とげとげしさ
6 ア かたじけない　イ めったにない　ウ どうしようもない　エ うれしい

問3 ――線部ⓐ「この人」とはだれか、二十字以内で書け。

問4 ――線部ⓑはどういう意味をもつか、次から選び符号を○で囲め。

ア 私を心配してくれていたのだと、お会いしたいものだ。
イ あなたを理解したと感じてしかたがないものだ。
ウ あなたの気持ちが身にしみたとも知らせたいものだ。
エ 私の気持ちもわかったと思われてみたいものだ。

問5 ――線部ⓒ・ⓔを現代語訳せよ。

ⓒ（　　）

ⓔ（　　）

問6 ――線部ⓓはどういう人か、十二字以内で書け。

問7 ――線部ⓕはだれをさすか、本文の語句を用いて「人」でまとめよ。

（　　）

問8 この文章で筆者が言おうとしたことは何か、自分のことばでまとめよ。

（　　）

高校ゼミ

古文Ⅲ
（読解編）

解答編

CKT

1　随筆(1)——基本古語（古今異義語）　P4〜7

演習1　**問1**　ⓐ　することもなく所在なげに。　ⓑ　はっきり見えない様子。ほの暗いさま。　ⓒ　ものものしい。仰々しい。　ⓓ　そのまま。　ⓔ　粗末だ。　ⓕ　奥ゆかしい。　ⓖ　親しみがもてる。心がひかれる。　ⓗ　まじめである。　ⓘ　すばらしい。清新である。　ⓙ　優美な様子だ。　**問2**　A　げす　B　やりど　C　うづき　**問3**　①　家の内部が、それほど荒れていないことをいう。　②　「荒れたる宿」という外観と対比していったもの。　**問4**　主の女性が趣深い心の持ち主で、ふだんからたしなみとして香をたいていたことをいう。　**問5**　門をよく閉めてしまいなさいよ。雨が降ると困ります。　**問6**　ある人　**問7**　ア

【解説】　**問1**　基本古語は古語辞典で確認しよう。いくつかの意味の中からその文に適した意味を選択する。　**問2**　古典の常識としての読みである。　**問3**　①は基本古語「すさまじ」の意味（興ざめだ。荒涼としている）をつかむ。②は「内のさまは」とあるから、外のさまとの対比である。　**問4**　客が来たからというので、急いでくゆらせた香の匂いでないといっているから、常日ごろからのたしなみと知る。　**問5**　「さしてよ」の「てよ」は、完了の助動詞「つ」の命令形。連語「もぞ」は、悪い事態を予測して、そうなったら困るという心配を表す。「……すると困る・……したら大変だ」と訳す。　**問6**　この文章で「給ふ」という尊敬語がだれに使われているかを知る。　**問7**　「忘れがたきこと」は、はっきりと印象・感銘を残すことをいう。

【現代語訳】　荒れている家で、人の訪れもない所に、ある女が世間体を憚ることのあるころなので、することもなく所在なげに閉じこもっているのを、ある方がお見舞いなさろうとして、夕月がほの暗いうちに、人目を避けて訪ねておいでになったところ、（その家の）犬がけたたましく怪しんで吠えるので、召使いの女が出て来て、「どちらから（おいでですか）」と言うその女に、そのまま取り次ぎをさせて（家の中に）お入りになった。（邸内の）もの寂しい様子は、どうやって（日々を）過ごしているのだろうかと、たいそう気の毒に思われる。粗末な板敷きの所にしばらくお立ちになっていると、落ち着いた様子の、若々しい声で、「こちらへ」と言う人がいるので、開け閉めも窮屈そうな引き戸から（ある人は）お入りになった。家の中の様子は、（外観にくらべて）それほど荒れて趣がないというのではなく、奥ゆかしく、灯火は（部屋の）向こうの方にほんのりと明るい程度であるが、調度品の美しさなどが見えて、（来客のために）にわかにたいたのでもない香の匂いが、たいそう親しみを感じる様子に（女主人は）住んでいる。「門をよく閉めてしまいなさい。雨が降ると困るから。お車は門の下へ（引き入れて）、お供の人はどこそこで（お休みください）。」と（だれかがいうと）、（ほかの者が）「今晩は安眠できそうだわ」と、そっとささやくのも、忍び声であるが、手狭な所なので、かすかに聞こえてくる。さて、（訪れたある人は）近況などをあれこれ情を込めて（女主人に）お話し申しあげているうちに、一番鶏も鳴いてしまう。過去・将来にかけてまじめなお話のうちに、今度は鶏もにぎやかな声でしきりに鳴くので、（もう夜は）明けてしまったのだろうかと、（その鶏の声を）お聞きになるのであるが、夜の明けきらないうちに急いで出て行かなくてはならないような場所がらでもないので、少しゆっくりなさっているうちに、戸の隙き間が明るくなるので、（女の心に）忘れられないことなどを言って、（その家から）お出でになる時に、（木々の）梢も庭（の草木）も一面にすばらしく青々と茂っているその四月ごろの明け方（の景色）が優美で趣のあったのを（忘れずに今でも）思い出しになって、（その家の）桂の大きな木が見えなくなるまで、今でも（そのあたりを通る時には）見送りなさるということである。

基本確認演習　古語読解にあたり、古語の知識は不可欠のもの。入試に頻出する重要古語を再点検し、語い力をアップしよう。

1　(1)　突然に（不意に）やって来て宿泊などするのは、きっと新鮮な感じがするに違いない。（徒然草）　(2)　驚くほど、かわいらしい様子がお添いになっていらっしゃる。（源氏物語）　(3)　御容貌や御様子は、不思議なほどよく似ていらっしゃる。（源氏物語）　(4)　三寸ぐらいである人が、とてもかわいらしい様子で座っていた。（竹取物語）　(5)　「こちらへ（おい

でなさい)」とおっしゃるが、知らん顔をして(気がつかないで)いる。(栄花物語) (6) ただ一人の子でもあったので、たいそうかわいがっていらっしゃった。(伊勢物語) (7) 何事においても、(話し手が)たいして知ってもいない方面の話をしているのは、(そばで聞いていても)にがにがしく聞き苦しいものである。(徒然草) (8) 「どうしてそんなに黙っているの。何かいいなさい。さびしいのに」とおっしゃるので、(枕草子) (9) (日が長くて)暮れにくい夏の日に一日中ぼんやりと物思いに沈んでいると、何というわけもなく物悲しいことだ。(伊勢物語) (10) 七夕を祭るのは優雅なことである。(徒然草) (11) 奈良の都は咲きほこる花が美しく照り輝くように、今繁栄のまっさかりであるよ。(万葉集) (12) 世間で評判が高くいらっしゃる光源氏を、こうした機会にお見申し上げなさいませんか。(源氏物語) (13) その用事がすんだならば、すぐに帰るのがよい。長くいるのはたいそうわずらわしい。(徒然草) (14) 廊の戸の開いている所に、そっと近寄ってのぞいた。(源氏物語) (15) 成長していく先の様子が見たい人だなあ。(源氏物語)

【解説】 古今異義語はこうだと思いこみやすい。文章全体の流れに注意して意味をとりたい。また、「あやし」には「怪し」「賤し」の違いもある。「かなし」にも「悲し」と「愛し」がある。古文の「にほふ」は基本的には視覚に関する語であるし、「ゆかし」は、ある対象に心が向かう意であるから、その文に添って、見たい・知りたい・聞きたい・行きたい、などとあてはめなければいけない。意味を的確に選びとることは大切なことである。

演習2 **問1** ⓐ すぐれている。 ⓑ まったくひどい。驚きあきれる。 ⓒ いとわしい。いやな感じだ。 ⓓ 意外だ。思いがけない。 ⓔ かわいそうだ。気の毒だ。 ⓕ 慕わしく思う。慕う。 **問2** 1 後伏見上皇が、(雅房を)近衛の大将にも任じたいとお考えになっていたころ。 2 雅房の大納言は、昇進もなさらなかった。 **問3** 「才かしこく、よき人」をさす。 **問4** 4 根拠がないことである。事実無根のことである。 5 どうしてかわいそうでないことがあろうか(痛ましいことなのだ)。 **問5** すべての生き物を見て、慈悲の心(いつくしみ、あわれむ心)を起こさないものは、人間ではない、ということ。

【解説】 **問1** 古今異義語である。古語辞典で確かめよう。 **問2** 主語といったら、すぐ登場人物を確かめること。雅房の大納言、院の近習、院が登場している。訳はやさしい。1は「ばや」(自己の希望)に注意する。 **問3** 指示語のさす内容はその指示語から前をたどってつかむ。 **問4** 4は「跡なし」で、根拠がない。5の「いかでか」は反語の副詞である。 **問5** 随筆や評論では、作者の主張は冒頭か文末に述べられていることが多い。ここは最後の一文である。

【現代語訳】 雅房の大納言は、学問がすぐれていて、立派な人なので、近衛の大将にもしたいと院が思っていらっしゃったころ、院の側仕えである人が、「ただ今、まったくひどいことを見ました」と申しあげなさったので、「何事か」とお尋ねなさったところ、「雅房卿が鷹に餌をやろうとして生きている犬の足を切りましたのを、中へだての垣根の穴から見ました」と申しあげなさったので、いとわしく憎らしくお思いになって、ふだんの(雅房への)御機嫌も変わってしまい、(雅房卿は官位の)昇進もなさらなかった。あれほどの人が鷹をお持ちになっていたことは、意外であるが、犬の足(の一件)は、事実無根のことである。うそ(を言われたこと)は気の毒であるが、このようなことをお聞きになって、(雅房卿を)お憎みになった院のお心は、まことに尊いことである。

総じて、生きているものを殺し、傷つけ、闘わせて遊び楽しむような人は、(人間ではなく)畜生が互いに傷つけ合うのと同類である。すべての鳥や獣、小さい虫までも、注意してその様子を見ると、(親は)子を思い、(子は)親を慕い、夫婦は互いに連れだち、ねたんだり、怒ったり、(あるいは)欲望が多く、我が身を大切にし、命を惜しんでいることは、まったく愚かで無知であるから、人間よりもいっそうひどいものである。そのもの(動物)に苦しみを与え、命を奪うようなことは、どうしてかわいそうでないことがあろうか(かわいそうなのだ)。総じてすべての生き物を見て、いつくしみあわれむ心がないような人は、人間ではない。

演習3　問1　ウ　問2　1　エ　2　ア　3　イ　4　ウ　5　ウ　6　イ　問3　自分に（気の毒だと）同情してくれた人。　問4　ウ　問5　現代語訳参照。　問6　それほど親密ではない人。　問7　心よき人の、まことにかどなからぬ人。　問8　ものごとには思いやりが大切だということ。

【解説】　問2　基本古語である。1は「言ふもさらなり」の省略で、この形は多い。5の「かど」が「才（かど）」「角」と迷うかもしれないが、他の語とともに古語辞典で確認する。　問3・6・7はすべて指示語がからんでいる。前をたどってつかむ。　問4　「思ひ知る」の意味と「にしがな」（自己の願望）を知る。また、上の「この人に」＝「見えにしがな」と言っていることも知る。　問5　ⓒは連語の慣用句である。ⓔは「さらに……打消」「え……打消」という副詞の呼応を知る。　問8　この文は頭括型の文で、最初に作者の言いたいことが表示されているのである。

【現代語訳】　どんなことよりも、情けのあるのが、男はもちろん（＝あらためて言うまでもなく）、女もすばらしく思われる。ちょっとしたことばであっても、切実に心に深くは感じなくても、気の毒なことを「お気の毒です」とも（いい）、あわれなこと（＝しみじみと深く心うつこと）を「ほんとうにどのように思っていることでしょう」などと言ったのを、人から伝え聞いたのは、面と向きあっていうのよりもうれしい。どうにかしてこの（同情してくれた）人に、（あなたのお気持ちが）身にしみましたとも知らせたい（＝その人から見られたい）ものだ、といつも感じることだ。

（自分のことを）必ず思ってくれるはずの人や、見舞ってくれるはずの人は、当然のことであるから、格別うれしいとは思わない。（しかし）それほど親密ではない人が、（ちょっとしたことに対する）返事を気やすくしたのは、うれしいことである。（こんなことは）たいそうたやすいことであるけれども、まったくできないことであるよ。

だいたい、気立てのよい人で、本当に才知のある人は、男でも女でもめったにいないもののようである。それでもまた（世の中は広いのだから）、そんな（すばらしい）人も大勢いるに違いない。

2　随筆(2)——慣用句・副詞の呼応

P8～11

演習1　問1　(1)　中宮定子　(2)　B　なかよし（仲良し）　C　さあらん人をばえ思はじ　(3)　なるほど（あなたの顔を見て）嫌いになると大変だ。それでは（顔を）見せてはいけません（＝見られてはいけない）。　問2　1　辞退する。　2　世話をする。ここは「忠告する」でもよい。　問3　(1)　あやまちてはすなはちあらたむるにはばかることなかれ。　(2)　過失を犯したときは、改めるのをためらってはいけない。　問4　お見せ申し上げることができないのです。　問5　ⓐ　のうし　ⓑ　てんじょう

【解説】　問1　全文の要旨をまとめたものである。会話文がだれの言葉かを知る必要がある。一か所『　』でくくってよいところをくくらずにあった。それがCの答えとなっていた。Aは絶対敬語「啓す」で知る。　問2は古語の意味。確認しよう。　問3は常識的な漢文で、格言として日本でも使われている。　問4　「え……ず」の呼応表現（不可能）を覚えよう。また、「見え」は言葉上は相手から「見られる」の意味であるが、ひっくり返して、相手に「見せる」と、ふつう訳す。　問5は古典の常識としての読みの一つである。

【現代語訳】　（頭の弁藤原行成は）何か中宮様に申しあげさせようとしても、その最初（の取り次ぎのとき）に口をきき始めた私を探し、（私が）下局（しもつぼね）（＝自分の部屋）にいても呼んで来させたり、いつもやって来て（中宮様への用件を）言い、実家に（帰って）いる時には、手紙を書いてきたり、自分自身でもおいでになって、「（あなたが）遅く参上するのならば、『（私が）このように申しています』と申しあげに（使いの者を中宮様のところへ）さしあげてください」とおっしゃる。「そんな取り次ぎには、別の人がございましょう」などと辞退するけれども、（頭の弁は）そのまま承知などしないでいらっしゃる。

「（ものごとは）そこにあるものに従い、（きまりなどを）定めずに、何事でも行うことを（古人も）よいこととしているようです」と、（私は）お世話をやき申しあげるけれども、「（これが）私の生まれつきの性分なのです」